

いじめ防止動画教材「私たちの選択肢」の活用方法について学ぶ研修プログラムの試み

A Training Program to Learn How to Use the Bullying Prevention Teaching Material “Our Options”

阿部 学・谷山 大三郎

ABE Manabu, TANIYAMA Daizaburo

要旨 本研究の目的は、いじめ防止動画教材シリーズ「私たちの選択肢」の活用方法について学ぶ研修プログラムの構想と実践を試み、本教材を多様な人々に実践してもらうためのサポートのあり方を探ることである。研修プログラムの結果からは、授業・教材デザインの特徴について丁寧に説明する時間を設けることと、受講者の感じる不安や疑問にできるだけ丁寧に応えていくという基本的な方針の有効性が示唆された。また、今後へ向けて、「PC操作」「授業中の子どもへの対応」「授業のまとめ方」などの点についての扱いを検討することや、講師の育成や受講者間でのネットワークづくりを進める可能性が示唆された。

1. 背景

筆者らが関わる研究チーム¹⁾は、いじめ問題への対応や子どもの自殺予防に寄与することを目的として、主として小学校高学年から中学校の授業で活用してもらうことを想定した動画教材シリーズ「私たちの選択肢」の開発と普及を行っている。現在までに3作を開発しており、いじめ抑止における脱・傍観者行動の重要性（阿部ほか2018）、悩みや不安を抱えた際のSOSの出し方（阿部ほか2019）、多様な性についての理解（藤川ほか2018）²⁾をテーマとして取り上げてきた。いずれの教材も、いじめに関する諸問題を描いた実写ドラマパートを中心としており、その問題についてクラスで話し合いを行うという活用方法を想定したものである。動画教材の扱い方や話し合いの進め方などをデザインした授業プログラム³⁾もあわせて開発しており、モデル指導案や授業に必要なツールも公開してきている⁴⁾。

「私たちの選択肢」の授業・教材デザインの特徴について確認をしておきたい⁵⁾。上記の「動画を見て話し合う」という説明だけでは授業・教材デザインにさしたる特徴はないように見えるかもしれないが、開発に際しては次の工夫を意図的に取り入れている。

ひとつは、動画の構成に関するものである。「私たちの選択肢」の動画は、一見すると情報モラルの教材によくある、トラブル場面を描いた実写ドラマ⁶⁾のようであるが、動画の展開に「選択と分岐」という工夫が取り入れられている。どの教材でも、ストーリーの途中で主人公が二者択一の選択に迷う場面が訪れ、そこでいったん動画が停止する。そして、雰囲気異なるナレーションが急に差し込まれ、動画から教室へ向けて「あなたが主人公ならどちらの行動を選びますか？」といった内容の問いかけがなされる。その後のストーリーは選択肢に応じて2通りに分岐するようになっている。子どもたちは、「特定の状況下で主人公がどういう行動をとるか」「もしも自分ならどうするか」「行動の結果として何が起こるか」といったことについて想像をめぐらすことになる。そして、どちらの展開にストーリーが進むかは、教室にいる子どもたちの話し合いを経た選択によって決まる

ことになっている。

その決定方法にも特徴がある。一般に、何かを決める際には多数決の手法が手軽で分かりやすく、教室での話し合いの場で採用されることも多いかもしれない。しかし、多数決という決定方法が投票者の意思を必ずしも適切に集約できる方法ではなく、その課題が投票者の無力感につながりうるという指摘もある(坂井2015)。本授業プログラムでは、いじめ問題について、子どもたちに当事者意識をもってもらいながら、真剣に話し合ってもらおうことを目指している。そのため、決定方法は多数決ではなく、選択人数の比率による「確率に応じた抽選」を採用することになっている。「確率に応じた抽選」とすることで、一人一人の選択が全体の比率に確実に影響を与えることになり、少数派の意見も単純な死票にはならず、子どもたちが選択肢について真剣に話し合うことが期待される。加えて、確率を擬似的にクラスの雰囲気と見立てているという意図もある⁷⁾。子どもたちは、はじめは主人公の行動を客観的に眺めているのだが、選択肢提示以降は自分自身の認識やクラスの状況について考えることを迫られることになる。

さらに、意見を発表してもらおう際の指名方法は「抽選による指名」で行うことを基本としている。教室で話し合いを行うと、一部の積極的な子の発言だけで授業が進むということが起こりうるだろう。一方で「私たちの選択肢」では、授業中にできるだけ多様な意見が出されることを期待している。多様な意見に耳を傾けながら自分の考えを深めたり、今のクラスの雰囲気を理解した上でこれから何ができるだろうかと想像したりしてほしいと考えている。そうした意図があり、「抽選による指名」という偶然性のある手法を導入することにした。この手法により、大きな声だけでなく、普段は共有されづらい小さな声にも光が当たることを期待している。なお、実際の授業では、「抽選による指名」を基本とするものの、自ら積極的に「発言したい」という意思を拒否することはしない。たとえば、最初の数名は抽選で指名し、そこで出された以外の意見もあるという場合は、挙手等により発言を求めることも行う。「抽選による指名」を導入するのは、多様な意見が表出されることを目指すためであり、子どもたちの発言を過度に管理しようとするためではない。

ここまで説明してきたように、「私たちの選択肢」の授業・教材デザインには、主に「選択と分岐」「確率に応じた抽選」「抽選による指名」という3つの特徴がある。開発者からすれば、どれも授業のねらいと連動した重要な要素と位置づけられるものである。なお、開発者らによるこれまでの実践結果(阿部ほか2018;阿部ほか2019)においては、これらの手法を用いることの有効性が示唆されている。授業を行う際には、これらのデザインの意図を理解した上で、子どもたちの多様な意見を引き出すことが望まれる。

2. 問題

これまでの実践結果から動画教材の有効性が示唆される一方で、普及へ向けての課題も想定される。たとえば前述のとおり、本授業プログラムは「動画を見て、話し合っ、意見を共有して終了する」といったような直線的な展開にとどまらない複雑なものである。

「選択と分岐」に応じて話し合いを活性化することが授業者には求められる。また、クラスで何かを決定する際に多数決の手法に慣れている授業者には、「確率に応じた抽選」はまどろっこしいものと捉えられてしまうかもしれない。他にも、子どもを指名する際に「抽選による指名」を用いることは、現在の日本の教室においては稀であり、授業者が違和感

をもつこともあるかもしれない⁸⁾。こういった要因により、開発者以外が授業を実施しようとする、諸要素の意図が分からず困惑することもあるかと懸念される。

また、筆者らは開発者以外による実践を幾度か参観してきたが、プログラムの流れにそって授業を進めようとしてはいるものの、「いじめを止めるために行動すべき」という1つの結論へ誘導するような雰囲気や授業者が無意識的につくってしまい、子どもたちが本音を出しづらくなっていると思われる場に遭遇することもあった⁹⁾。授業者として熱意をもち、「いじめはよくない」ということを真剣に訴えようとしているのだが、その勢いに押されてか、「困っている人を助けたいという気持ちはあるが、勇気がないので自分から行動しづらい」「SOSを出した方がよいと思うが、おおごとになりそうなのでためらってしまう」といったような、子どもたちの揺れる思いが表出されづらくなっているように感じられた。結果として、授業者の意図を読むような回答がなされがちになり、多様な意見を共有したいという本来のねらいとは異なる授業となってしまう。

他にも、次のような課題が想定される。「私たちの選択肢」の3つの特徴は、学習者（プレイヤー）に選択の余地があったり、偶然性や運の要素があったりするため、ゲーム的な盛り上がりを誘う授業のスパイスのようなものだと理解される懸念がある。しかし、仮にそれらの要素により授業が盛り上がる場合があるとしても、本来の意図は単に授業を盛り上げるのではなく、多様な意見を出し合い真剣に議論してもらうことにある。やはり、授業・教材デザインの意図について、できるだけ適切に理解してもらうよう策を練る必要があると思われる。

そもそも、開発者側の視点からすると上記のような課題があると想定されるものの、授業者が実践に際して不安や難しさを感じる点や、デザインの意図が伝わりづらい点などが、具体的にどのようなものであるかは明らかではない。開発者の意図が誤配されることで、新たな授業・教材デザインの可能性がひらかれるということもありうるが、まずは意図が適切に伝わるような試みを積み重ねることが重要だと考えられる。

3. 目的と方法

そこで本研究では、いじめ防止動画教材「私たちの選択肢」の活用方法について学ぶ研修プログラムの構想と実践を試みる。これから初めて「私たちの選択肢」を実践しようとする人々に対して、単に授業の流し方を伝えるだけでなく、「選択と分岐」「確率に応じた抽選」「抽選による指名」の意図について十分に説明をすることや、その他に不安や難しさを感じる点などをあぶり出しつつ解消していくことを含めた研修プログラムを構想・実践する。この試みについての報告をとおして、「私たちの選択肢」を多様な人々に実践してもらうためのサポートのあり方を探ることを目的とする。

研修プログラムは、次の対象者に向けて行う。ここまで論じてきた問題意識を筆者らが共有すると同時に、「私たちの選択肢」の共同開発者である千葉県・柏市教育委員会では、「SOSの出し方に関する教育」¹⁰⁾を確実に行うために、各中学校に配置されたスクールソーシャルワーカー（以下、SSW）¹¹⁾が「私たちの選択肢」の1つであり、関連する内容をテーマとしている授業プログラム「どうする!?!SOS～ハウレンソウ（報告・連絡・相談）教育」（以下、「どうする!?!SOS」）を中学校2年生を対象にクラスごとに実践するという計画を立てていた。そこで、柏市教育委員会と連携し、「どうする!?!SOS」の授業プログ

ラムについて初めて学ぼうとするSSWを受講者とした研修を行うことにした。

研修プログラムの詳細については後述するが、大枠としては、2019年度に数回の対面での研修会と、学校現場での授業参観および実践を行った。今回は、研修のプロセスやSSWに回答してもらったアンケート、授業実践の結果、講師側の省察などを取り上げ、総合的に考察をする。

4. 授業プログラム「どうする!?SOS」の概要

研修プログラムの構想と実際について記述する前に、「どうする!?SOS」の概要について確認をしておきたい。

「どうする!?SOS」は、「SOSの出し方に関する教育」を行うための授業プログラムとして開発されたものである（阿部ほか2019）。これまで論じてきたように、主人公が二者択一に迷う場面を描いた実写ドラマパートを中心とした動画教材を用いるものであり、「選択と分岐」「確率に応じた抽選」「抽選による指名」を取り入れて実施することを想定したものである。小学生高学年から中学生を主たる対象と想定しており、実施のしやすさを考慮し45～50分1コマで完結するプログラムとしている。動画視聴や話し合いをとおして、SOSを出す際の手順や出した後のイメージを具体的に描けるようになってもらうことや、SOSを出すことの難しさや重要性をふまえた上で今後自分自身やクラスでできることはないかと考えてもらうことを授業のねらいとしている。

実写ドラマパートの主人公は、あからさまに暴力を受けたり排除されたりしている訳ではないものの、周囲にからかわれ続けている中学校2年生の男子である。あらすじは次のとおりである¹²⁾。

中2の網川正樹は内気な性格である。クラスではいつも数名の男子たちからからかわれているが、特に反発するでもなく、SNSに表では言えないことを書き込みながら日々をやり過ごしている。ところが、そのような日々が続くにつれ、「学校に行きたくない」という気持ちが芽生えてくる。一度は親に相談しようと思ってみたが、親も仕事で忙しく、結局は誰にも相談できない日々が続く。ストレスが溜まり、一人で家にいる際につい鞆を蹴飛ばしてしまうと、かつて学校で配られた「ハウレンソウカード」（悩みの相談先や相談アプリの利用方法などが記された架空のカード。SOSに関連し「報告・連絡・相談」すなわち「ハウレンソウ」についての情報を載せたカードという設定）が飛び出たのが目に入る。スマホを手にとり、記載されていた相談アプリを開き、相談内容を打ち込み、送信しようかと思った網川だが……。

ここまですべてを視聴した後、授業を行うクラスでは、自分が主人公であったら相談を「①送信する」「②送信しない」のどちらを選ぶか考え、話し合うことになる。小グループでの話し合いを経て、「抽選による指名」を基本として、全体で意見を共有し合う。そして、「確率に応じた抽選」により、選ばれた方の展開を視聴する。選択肢①②に応じた展開①②は次のとおりである¹³⁾。

【展開①】（送信をした場合）問題が深刻化する手前で相談できたことにより、自分

の希望する仕方で相談窓口や学校と適切にやりとりをすることができた。環境が一変した訳ではないが、学校に行くのも悪くないと思えるようになった。

【展開②】（送信をしない場合）誰にも相談できず、ストレスがたまっていき、ついには学校に行けなくなってしまった。「暗い部屋で一人で生きていきたいと思います」と網川がSNSに書き込む様子が描かれる。

なお、「私たちの選択肢」は望ましい結果を迎えるエンディングを目指すゲームではないため、抽選で選ばれなかった方の展開もクラスで視聴をし、双方の違いについて考えてもらう。その上で、授業の最後には、SOSを出すことについての解説がなされた動画も視聴することになる。

5. 研修プログラムの構想

研修プログラムを構想するにあたり、次の点に留意することにした。1つは、「いじめを止めるために行動すべき」といった結論ありきで進めるのではなく、子どもの多様な意見を引き出しながら話し合いを行いたいという授業全体のねらいや、「選択と分岐」「確率に応じた抽選」「抽選による指名」を取り入れる意図について、受講者に適切な理解をしてもらうことである。もう1つは、本授業プログラムに対して受講者が感じる不安や難しさをあぶり出しつつ解消することである。前者については、研修の序盤に丁寧な説明の時間を設けることとし、後者については、受講者へのアンケートを複数回行い、回答内容を全員で共有した上で、それらに回答していくという方針をもつこととした。

上記の方針のもと、2019年9月から2020年1月までの期間に研修プログラムを構想・実施した（表1）。実施に際しては、大まかな流れや内容は想定しておくものの、各回の細部はその都度詰めていくという方式を採用した。受講者の状況に柔軟に応じることが重要と考えたためである。事前（第0回）に資料を配布してアンケートに回答してもらうことからはじめ、その後に現場での実践を含めた5回分の研修を行った。受講者の総数は9名である¹⁴⁾。対面での研修会の講師は、筆者の一人である阿部（以下、講師）が主に担当した。

なお、今回の実施年度ではすべてのSSWが授業を行うのではなく、まずは特に希望をする2名に実施してもらうこととした。長期的視野に立ち、実施を焦らずに、次年度以降の実施拡大に備えようと判断したためである。

表1 研修プログラムの概要

過程	実施方式	研修の内容
第0回	事前の資料送付	<ul style="list-style-type: none">・SSWに資料（動画教材を収録したDVDと指導案や解説がセットとなっている冊子）を事前に配布し、確認をしておいてもらう。・授業を行う上での不安や疑問などについて回答する事前アンケートを提出してもらう。

第1回	対面での研修会 (120分程度)	<ul style="list-style-type: none"> ・「私たちの選択肢」の開発メンバー（講師）が、「私たちの選択肢」の概要、授業のねらい、「選択と分岐」「確率に応じた抽選」「抽選による指名」を取り入れる意図等について講義をする。 ・事前アンケートで挙げられていた不安や疑問について回答をする。 ・SSWを生徒役として「どうする!?SOS」の模擬授業を行う。終了後に振り返りを行う。
第2回	学校訪問	<ul style="list-style-type: none"> ・教育委員会の担当者（教員経験者）が、市内中学校にて実際に授業を行い、SSWに参観をしてもらう。 ・参観後には不安や疑問をたずねる中間アンケートに回答・提出をしてもらう。
第3回	対面での研修会 (120分程度)	<ul style="list-style-type: none"> ・「私たちの選択肢」の開発メンバー（講師）が、授業参観後のアンケートに回答をする。 ・授業予定者のSSWが、他のSSWを生徒役として模擬授業を行う。終了後に振り返りを行う。
第4回	学校訪問	<ul style="list-style-type: none"> ・授業予定者のSSWが、自身の担当校にて実際に授業を行う。他のSSWはその授業を参観する。
第5回	対面での研修会 (60分程度)	<ul style="list-style-type: none"> ・今年度の実践について振り返り、次年度への課題を確認する。 ・最終アンケートに回答・提出をしてもらう。

6. 研修プログラムの実際と考察

前述のとおり、本研修プログラムは省察的に柔軟に進めてきたものであるため、各回の内容や過程について改めて記述をし、さらにアンケートの結果等もあわせて取り上げながら、考察をしていくこととしたい。

6.1. 第1回目

第1回目は、授業・教材の開発メンバーである講師による概要の説明と模擬授業を行った。

前半は、まずは、本稿にも記してきた授業プログラムの概要や特徴について、用意しておいたスライド資料（図1）をもとに講義をする時間をとった。SSWは関連事前に資料に目をとおしているはずだが、重要な点であるため改めて細かく説明する時間をとることにした。

さらに、事前アンケート（n=8）で出された不安や疑問についても表2および表3のようにまとめた上で取り上げた。不安な点（選択式）として回答が多かったものは、「想定外の意見が出た場合の対応」「授業のまとめ方」「板書」「PCの操作」であり、回答者の半数が選択をしていた。自由記述でも、子どもとのやりとりに関わるものや、授業の進め方に関するものがあげられていた。このように不安な点が事前に理解されたため、模擬授業に入る前に表2と表3の内容をSSWと共有し、模擬授業を見る観点とすることで、不安の解消につなげようと考えた。また、模擬授業を行う際には上記の点が認識されやすいよう留意することにした。なお、回答が多かったものの中で「板書」「PCの操作」につい

では、実践経験のある者であれば不安を感じることはないのかもしれないが、今回受講するSSWには不安を感じる者が多いことが理解された¹⁵⁾。そこで本年度は、教育委員会の担当者らが板書やPC操作をサポートすることにし、SSWには授業の進行や話し合いの活性化に注力してもらうことに後日決定した。授業者となる人々にあわせて、スモールステップで力量を高めてもらえる仕組みをつくるという観点があることが理解される。

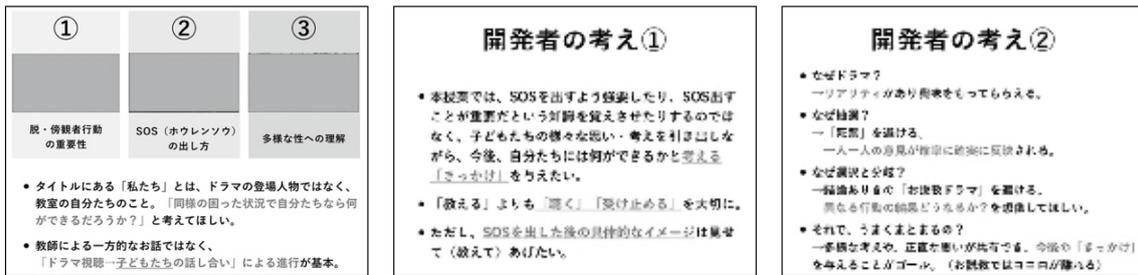


図1 講義に用いたスライド（一部）

表2 事前アンケート「授業を行う上で不安なこと」（選択式・複数回答可）

質問項目	回答数
想定外の意見が出た場合の対応	4
授業のまとめ方	4
板書	4
PCの操作	4
子どもとのやりとり全般	3
声の大きさ	1
授業の流れを覚えられるか	1
人前で緊張してしまわないか	1
子どもの話し合い中の振る舞い	0

表3 事前アンケート「授業を行う上で不安なこと」（任意・自由記述）

質問項目	回答
自由記述	<ul style="list-style-type: none"> 児童生徒1人1人に授業内容について考えてもらえるように言葉を投げられるか不安があります。 授業の進め方により、さらに深く考えてもらう場面となるとよいが、うまくまとめられず、生徒に伝わらないと理解度に影響するのではないかと思います。どんな展開でも生徒自身にとって収穫のできる授業のまとめ方のポイントがあったら教えていただきたい。 他の選択肢が子どもから意見が出るかと思いますが、想定されるものをあらかじめ知っておきたいと思います。 モデル授業をみたいです。

後半は、SSWを生徒役として講師が模擬授業を行い、終了後に振り返りを行った。振り返りでは、授業を体験した上で感じた疑問や質問などを出してもらい、開発者としての考えをその場で回答していった。提出された意見をカテゴリに分けたものを表4に示す。実際の授業のプロセスを体験した直後ということもあってか、「PC操作」のような道具の扱いに関する内容よりも、子どもへの対応や授業の展開の仕方に関する意見が多く出されていることが分かる。子どもへの対応に関するものについては、否定的な意見なども丁寧に聴いてもらうことを基本としてほしいと伝えた上で、これまでに出示された意見と対応例も紹介した。即興的なやりとりであったが、できるだけ事例をもとに具体的に回答するよう留意した。今後は、講師側が具体例を回答できるよう事例を集約・共有しておくことや、適切な内容を伝達できるよう講師側のトレーニングのあり方を検討することが必要になると考えられる。

研修終了後に記入してもらった感想では、「実際に模擬授業を受けたことで、意見の多様性を知ることができた。人の意見を聞くということを考えさせられた」「抽選アプリを使うことで公平性が保たれるのが良いと思いました」「授業の時間配分など実際にやってみて実感できてよかったです」といった授業のねらいや特徴に関連した記述がみられた。研修にある程度の効果があっただろうと解される。課題面について言及するものには、たとえば「意見を発表された時、意見の内容をまとめるのに不安。1対1にはなれているが大人数では緊張してしまう」「生徒一人一人に考えてもらうための対応や時間の流れ方(タイムスケジュール)がうまくいくか」といった記述があった。こうした点については、次回以降さらに積極的に取り上げて共有したり、回答をしたりすることにした。

表4 講師による模擬授業の後に出された意見

カテゴリ	意見
授業中の子どもへの対応	<ul style="list-style-type: none"> ・ネガティブな意見が出た時の対応。 ・言ってはいけない言葉、タブーな言葉。 ・生徒からの質問の処理の仕方。 ・授業をする上で、当事者がいる場合の配慮。 ・いじめをカミングアウトされたら？
授業外も含めた子どもへの対応	<ul style="list-style-type: none"> ・本当に相談できない子への配慮。 ・どうしても相談できない生徒への対応。
時間配分	<ul style="list-style-type: none"> ・意見がたくさん出て、時間超過しそうになったら？
選択肢	<ul style="list-style-type: none"> ・少数の選択肢はあるのか(選択人数が偏ることはあるのか)。
ワークシート	<ul style="list-style-type: none"> ・ワークシートは最後どうするのか。 ・書く時間(ワークシート)が短いのでは？
板書	<ul style="list-style-type: none"> ・整理して板書するのが難しい。 ・板書しながら授業を進める難しさ。
機材	<ul style="list-style-type: none"> ・操作トラブルがあったときどうするか。
アイデアや自分なりの考え	<ul style="list-style-type: none"> ・信頼できる窓口を教えた方がよい。 ・相談先をいくつか提示できると相談する動機につながる。
その他	<ul style="list-style-type: none"> ・ストップイットについて詳しく教えてほしい¹⁶⁾。

6.2. 第2回目

第2回目には学校現場を訪問し、「どうするSOS!?!」が行われている様子を実際に参観してもらった。SSW各自の都合に応じて、原則として1コマ以上の授業を参観してもらうことにした。参観後には、中間アンケートとして、「授業を見て分かったこと」と「分からなかったこと・不安など」を自由記述で提出してもらった。

前者については、「SOS授業は行った方が絶対いいと思います」「SSWが授業を行う意義がわかりました」といったような授業を行うことの意義について記述したものや、「確率で発問をすすめていく時に説明をした方がよりよいということが理解された」「動画から何を学んでほしいのかと伝える大切さや考えてほしいポイントの詳細を知ることが出来た」「授業内の流れが分かった」といったような授業進行上の留意点について気づいた点を記述したものなどがみられた。前者の記述量は後者と比較して明らかに多かった。第1回目のような模擬授業に加え、実際に現場を参観することの意義が理解される。現場での参観が難しければ記録映像の視聴などで補うことが代案となるだろう。

後者についても、「ワークシートを記入する際に網川君だったらどうするのかを考える言葉かけをするのが良いのかと思いました」「抽選で発表する子の発表内容を、さらに深めさせるため、質問してもよいのかと考えた」といったような、自分なりのアイデアについて記述したものがほとんどであった。「分からなかったこと」としての回答ではあるが、それらを問題点として捉えるよりは、授業をうまく行うために考えをめぐらせた結果だと肯定的に捉えた方がよいだろう。

また、不安なこととして、「一連の流れがスムーズにできるか不安です」という記述が1件あった。初めて授業を行うことへの不安がすぐに解消されないのは当然のことであろう。そうした理解を基本とした上で、積極的にアイデアを出している他の受講者との意見交換を促すことが、不安の解消には有効ではないかと思われる。ひとまず次回の研修会では、冒頭に授業参観をしての感想をSSW同士で改めて共有するところからはじめ、記述された意見のすべてに対して講師からコメントを返すことを行うことにした¹⁷⁾。

6.3. 第3回目

第3回目には、授業予定者となっている2名のSSWによる模擬授業と検討を行った。2名とも事前に練習をしていたことがうかがわれ、授業の進行は概ね問題なく行われた。その後、SSW間での意見交換を経て、講師から助言を行った¹⁸⁾。細かな点についても言及したが、授業実施日が迫っていることもふまえて、すぐに改善できそうなことや、具体的な提案、うまくいっていた点の確認などを重点的に伝達するよう留意した。

6.4. 第4回目

第4回目は、2名のSSWによる中学生を対象とした実際の授業実践である。研修でありつつ、本番であるとも言える。2名それぞれが勤務する公立中学校2年生を対象に、クラスごとに授業を実施した。2名のうちA氏は6クラス、B氏は4クラスに授業を行った。他のSSWは、各自の都合にあわせて授業を参観した。

筆者らが授業を参観し、意見交換した限りでは、授業は概ね問題なく進行することができており、子どもたちの話し合いも充実していたと解せるものであった。B氏が実践終了

後に記してくれた感想にも「クラスの特徴もあるのかもしれませんが、授業を重ねるごとに今回の授業の目標でもある、いろいろな意見を出し合う授業ができていったかと思えます」という手応えを感じたという記述があった。この内容は、授業後に意見交換をした筆者らも同じ感想をもつものであった。今回は、PC操作を授業者が担当しなかったことが功を奏したかもしれない。もちろん本来はすべての作業を授業者が行えた方がよいのだが、特に実践の初期段階においては、子どもとのやりとりに注力できるような仕組みづくりについて検討する余地があるのだろう。

生徒に回答してもらったアンケートもみてみよう。事後アンケートを実施したA氏による6クラス分の結果を表5と表6に示す(n=184)。表5は授業のねらいが達せられたか問うものであり、表6はねらいを達成するための方法である話し合いが充実していたか問うものである。いずれの質問においても、8割以上が肯定的な回答である「とても」「まあまあ」を選んでいる。

授業プログラム自体の有効性は阿部ほか(2019)ですでに示されているため、本稿では詳細な検討には踏み込まないが、実践の結果を総合的にみると、授業は適切に実施されたと解してよいように思われる。研修プログラムについても、少なくとも、受講者に悪影響を与えたということはないだろう。

表5 「一人で抱え込まず、積極的に誰かに相談しようと思った」

とても	まあまあ	あまり	まったく	未回答
79	70	25	10	0
42.9%	38.0%	13.6%	5.4%	0.0%

表6 「クラスの話し合いにより自分の考えはより深まった」

とても	まあまあ	あまり	まったく	未回答
57	101	20	6	0
31.0%	54.9%	10.9%	3.3%	0.0%

6.5. 第5回目

最後となる第5回目の研修会では、全体の振り返りと最終アンケートを行った。

振り返りの冒頭では、SSWの授業実践について講師からのコメントを伝えた¹⁹⁾。たとえば、当初より「授業のまとめ方」が分からず不安だという声があがっていたが、実際の授業の様子をふまえ開発者として改めて考えたこととして、下記の内容を伝えた。

事前研修で、「授業のまとめ方」が分からないという意見もあったように記憶しています。今回の参観をとおして改めて考えましたが、「みんな共通の結論」ではなく、「生徒個々に応じたまとめ」という観点が重要だろうと思いました。授業を受けて「積極的に相談したい!」と思えた生徒には、「是非そのように」と伝えたいですし、「相談しづらい、大ゴトになる」と心の中で思っている生徒もいることを想定すると「クラ

スで相談しづらい人もいるかもしれない。何かできることはないか？」と問いかけた
いです。実際、1つの動画を見ても、生徒一人一人の感想は様々です。1つの問題に
対して、様々な見方があることを前提として、「一人一人が自分なりにできることを
考えてほしい」というまとめを目指すべきかと思いました。

こうした説明の仕方が最善であったかは分からないが、少なくとも講師本人からすると、
SSWは熱心に聴いてくれていたと感じられた。講師側としては、これまでの研修プロセ
スにおいて、「授業のまとめ方」などの受講者が不安に思う点にどのような言葉で応える
ことがよいのか暗中模索の面もあったのだが、この時点では、研修や授業参観などの同じ
場を共有しながら、また実際の授業現場や受講者の顔などをイメージしながら、講師個人
なりに事象を言語化し、説明の仕方を探っていくことが重要なのだろうと感ずることがで
きた。そうした営みを経ること自体が講師には必要なかもしれない。また、営みの結果
として獲得した言葉や説明の仕方を他の講師と共有していくことにも意義があるかもしれ
ない。

その他には、実施をしてみて発覚した資料の不備²⁰⁾、授業を重ねるたびに子どもとのや
りとりにより深まりが出ていたと感じられたこと²¹⁾、授業の進め方についての補足²²⁾、授業中
に出されていた相談をすることについての否定的な意見の例などを取り上げてコメントを
伝えた。

その後は、SSW同士での意見交換を行い、事務的な事項などを確認し、最終アンケー
トに記入してもらい、研修プログラムの全日程を終えた。

最終アンケート（n=9）では、「私たちの選択肢」の授業・教材デザインの主たる特徴
である「選択と分岐」「確率に応じた抽選」「抽選による指名」それぞれについて、「はじ
めてこの授業プログラムについて学習する新人さんから「なぜ、そのポイントが重要な
のですか？」と問われたら、どのように答えますか？」という質問に回答してもらい、受講
者の理解度を探ることとした。表7は、開発メンバーである筆者らが、回答全体を一読し、
A「十分に説明できているもの」、B「記述量が少ないが要点は抑えており、特徴について理
解していることはうかがえるもの」、C「誤解していることが疑われるもの」、D「その他」
のカテゴリを作成し、合議の上で分類をした結果である。

文字数の規定をしていなかったため、各回答の文字数にはばらつきがあるが、表7にあ
るとおり、各特徴について、概ね理解ができていることがうかがえる結果となった。たと
えば、Aと評価した記述には、「選択と分岐」では「ドラマが少しずつ展開していくこと
で生徒が主人公に自分を重ね合わせいろいろと考えていける時間がある。又、選択により
結末が変わることさらに深く考えることができる」、「確率に応じた抽選」では「学校で
はなんでも多数決で決める傾向があります。少数意見は流されてしまうことが多く周り
と違う考えを持つことを否定されているように感じる生徒も少なくありません。抽選をして
ドラマの結末を決定するというのは大人が生徒に大人が考える「正しい考え」を押し付け
ていないことを伝えるために必要です。また、少数意見に対しても尊重されるチャンスが
あることを表していると思います」、「抽選による指名」では「挙手だと日頃から発言する
生徒に限られる可能性がある。日ごろから意見を言わない子にも抽選アプリではあてられ
ることができる。自己表現をしない子の意見を聞き、ほかの人にも理解してもらえる機会

となる」といったものがあつた。なお、Dと評価した回答はすべて同じ方のものであるが、特徴について誤解しているというよりは、おそらくは質問の意味を取り違えた上での回答であつたと解されるものであつた。

最終アンケートでは、研修全体をとおしての感想も記述してもらつていた。いくつかを取り上げると、「製作者の方からじかにご指導いただけるのがありがたかつたです」という講師に対する謝意を示すもの、「SSW認知のためにも生徒のためにも必要なものであることは確かだと思ひました」という授業プログラムや自分たちが授業を行うことについての意義を感じたというもの、「30人いれば30人の価値観・捉え方があることを教える側も持っていることが大切だと思ひました」という授業者としての心構えについての考えを記したのものなど、多様な記述があつた。概ね、研修や授業を行うことに対して肯定的な記述であり、否定的だと捉えられる記述はなかつた。研修を行ったことへの謝礼の意味もあると推察されるものの、研修プログラムに大きな問題はなく、ある程度理解や満足をしてもらえたのだと捉えてよいように思われる。

表7 授業・教材デザインの特徴に関する記述の評価と回答数

特徴	A	B	C	D
「選択と分岐」	7	1	0	1
「確率に応じた抽選」	7	1	0	1
「抽選による指名」	6	2	0	1

7. 総合的考察

ここまで記述してきた研修プログラムの実際をふまえて、今後の実践者へのサポートのあり方について考察したい。

まず、本研修プログラムの基本方針は、授業・教材デザインの特徴について丁寧に説明する時間を設けることと、受講者の感じる不安や疑問にできるだけ丁寧に応えていくということであつた。これまでの記述から総合的に判断すれば、これらの方針をもちながら研修をデザインすることには概ね有効性があると理解される。原則としては、今後もこれらの方針を基本としていけばよいだろう。

特に、受講者の不安や疑問を明るみに出しつつ解決していくという方針は、重要であつたと考えられる。そうした点が事前に理解されたため、次回の研修に反映させることができ、受講者の関心に応じた研修デザインにつながつたと思われる。今後、教師や教師以外の人など、より多様な人々に広く「私たちの選択肢」を実施してもらおうと思うのであれば、その時々受講者の状況にあわせて研修をデザインすることの重要性は、さらに増していくことになる。時間の許す限り、オーダーメイド型の研修を進めていくことが理想である。

ただし、毎回柔軟に研修を組み立てるのが良いとしても、それでは効率が悪いという難点もあり、結果として多くの人々に研修を受けてもらうことが難しくなってしまうかもしれない。今回、有意義だつたと思われる点を予め研修プログラムに組み込んでおくことも、重要となろう。

たとえば、今回の受講者が感じていた不安や疑問は、事前アンケートや研修のプロセスをふまえると、「PC操作」「授業中の子どもへの対応」「授業のまとめ方」が主たるものであったと言える。こういった点についての扱いについては、予め検討しておくべきであろう。

今回は、教員ではないSSWが受講者だったため、「PC操作」は他者がサポートすることにし、子どもとのやりとりに注力できるよう仕組みをつくった。そうした対応が今後も有効かもしれないし、あるいは「PC操作」に習熟する時間を豊富にとるという方法もありうるだろう。いずれにせよ、「PC操作」をどう扱うかは「おまかせ」とするのではなく、研修プログラムをデザインする時点で受講者の状況にあわせて考えておかなければならない。

「授業中の子どもへの対応」「授業のまとめ方」については、今回は講師が自身の実践者や観察者としての経験をもとに、具体例を伝えることが多かった。この例をふまえると、すでに豊富に授業を行っている者もつ知識や技能、あるいは経験談などを何かしらの仕方で共有していく取り組みを進める必要があると思われる。これから授業を行おうとする者に対しては、抽象的で理念的な指導だけでなく、具体例にもとづく指導も必要である。講師一人の経験から十分な内容を伝えられる可能性もあるが、講師自身が他の授業者の例に学んでおいたり、適宜それらを参照したりすることで、指導の質はより高まるだろうと思われる。

言い換えれば、講師側のトレーニングについて検討する必要があるということになる。これまで、筆者らのかかわりの中では、研修の講師役の属性については詳しく検討はせず、開発メンバーや経験が豊富な者の誰かがスケジュールに応じて講師役を務めてきていた。経緯はどうかあれ過去の研修にも一定の意義はあったはずだが、それぞれが知見を共有することなく研修を担当することが続くと、授業・教材デザインの意図が誤配されながら伝わっていき、気づけば本質からそれた授業が広まっていくということも懸念される。講師の育成や実践知についての情報共有の仕方を検討すべきである。

また、講師間のネットワーク形成以外にも、受講者間でのネットワークをつくることにも可能性がある。実際の授業では、子どもの反応は様々であり、対応方法にマニュアルがある訳ではない。また、授業の進め方にはそれぞれの授業者の個性もでるだろう。研修を行いはするものの、原則をふまえた上で何ができるかは、その都度、授業者本人が探っていくしかない。その際に、一人で悩むのではなく同じ立場の者同士で情報共有することができれば、学習の効果も高まるはずである。今回は、もともと活動をともにするSSWを対象として研修を実施したことに加え、個々の不安や疑問を講師主導で共有するようしたり、意見交換を促したりすることを積極的に行った。そのように、ひとつの研修プログラム内での小さなコミュニティづくりを促すという方法もあれば、ICT等を活用して、より広く全国の実践者が交流できるような仕組みをつくるという方法もあるだろう。「私たちの選択肢」をとおして、授業の力量を高め合えたり、いじめ問題の解決に寄与したいと思う人が集えたりするようなネットワークがつくられることを期待したい。

今後は、本研究で得られた知見をもとに研修プログラムの改良と実施を重ねることを第一の課題としたい。また、本研究では、単純に研修プログラムの中身をどう組み立てるかということこそえたネットワーク形成の可能性についても示唆が得られた。そうした意味では、教師教育や教員養成、開かれた学校づくりといった観点からもこの営みを見直すことができそうである。さらに、こうした大きな課題に向き合う意味でも、また昨今の対面

での研修が行いづらい状況に対応する意味でも、オンラインでの研修プログラムの開発と実践についても検討すべきであろう。

付記

- ・本稿は、阿部・谷山（2020）に大幅に加筆をしたものである。
- ・研究に協力いただいた柏市教育委員会、SSW、生徒の皆様には感謝を申し上げます。

参考文献

- 阿部学・藤川大祐・竹内正樹・市野敬介・石原友信（2016）「ドラマ教材を活用した情報モラル授業プログラムの開発と評価—コミュニケーションアプリでの「既読」に関するトラブルを題材として—」CIEC研究会報告集、7、pp. 11-17
- 阿部学・藤川大祐・山本恭輔・谷山大三郎・青山郁子・五十嵐哲也（2018）「脱・傍観者の視点を取り入れたいじめ防止授業プログラムの開発—選択と分岐を取り入れた動画教材を用いて—」コンピュータ&エデュケーション、45、pp. 67-72
- 阿部学・藤川大祐・山本恭輔・谷山大三郎（2019）「分岐と選択を取り入れた動画教材を用いて「SOSの出し方」を考える授業プログラムの開発」コンピュータ&エデュケーション、47、pp. 55-60
- 阿部学・谷山大三郎（2020）「動画教材活用による「SOSの出し方に関する教育」の実施方法について学ぶ研修プログラムの試み」CIEC春季カンファレンス論文集、11、pp. 157-158
- 厚生労働省（2017）「自殺総合対策大綱～誰も自殺に追い込まれることのない社会の実現を目指して～」<https://www.mhlw.go.jp/file/06-Seisakujouhou-12200000-Shakaiengokyokushougaihokenfukushibu/0000172329.pdf>(2020年6月9日確認)
- 坂井豊貴（2015）『多数決を疑う—社会的選択理論とは何か—』岩波書店
- 竹内正樹・阿部学・藤川大祐・山本恭輔・齊藤剛（2019）「動画配信に関するトラブルを題材とした情報モラル授業プログラムの開発—小学校高学年を対象とした実践—」コンピュータ&エデュケーション、46、pp. 92-95
- 藤川大祐・片岡洋子・山本恭輔・阿部学・谷山大三郎（2018）「多様な性について学ぶ動画教材の開発—いじめ防止教材シリーズ「私たちの選択肢」の拡充—」日本教育工学会第34回全国大会講演論文集、pp. 277-278
- 文部科学省（2006）「学校等における児童虐待防止に向けた取組について（報告書）」https://www.mext.go.jp/a_menu/shotou/seitoshidou/06060513/_icsFiles/afieldfile/2016/04/08/1235293_001.pdf(2020年6月9日確認)
- 文部科学省（2018）「児童生徒の自殺予防に向けた困難な事態、強い心理的負担を受けた場合などにおける対処の仕方を身につける等のための教育の推進について（通知）」http://www.mext.go.jp/a_menu/shotou/seitoshidou/1408025.htm(2020年6月9日確認)

- 1) 千葉大学、敬愛大学、ストップイットジャパン株式会社、柏市教育委員会などが関わっている。
- 2) 性的少数者の人々は、社会や周囲の無理解や偏見によって自殺念慮を抱く割合が高いとの指摘がある。これまでは、いじめ問題において多様な性に関する内容が取り上げられることは少なかったかもしれないが、こうした背景があることを重く捉えテーマの1つとして選択した。
- 3) 後述のとおり、本教材には授業プログラムと連動したいくつかの特徴がある。教材自体と授業プログラム自体を切り離して語ることが難しい場合もあるため、文脈に応じて授業と教材という語を併記していたり、どちらかの語のみ記述していたりすることを断りたい。
- 4) 授業を実施するために必要な資料は、ストップイットジャパン株式会社のウェブサイトからダウンロードや郵送申し込みができる。必要なツールの1つには、「選択肢抽選」と「ランダム指名」ができる「抽選アプリ」もある。<https://www.stopit.jp/workshop>(2020年6月9日確認)
- 5) 「私たちの選択肢」は、様々な立場の者ら（研究者、学校関係者、企業関係者、行政関係者、当事者など）で協力して制作している。本稿における説明は、その一員である筆者らの理解にもとづくものである。
- 6) たとえば、阿部ほか（2016）、竹内ほか（2019）を参照のこと。これらは、情報モラルに関するトラブルを描いた動画教材についての報告である。どちらの動画でも、子どもたちがトラブルに遭う場面までが、ひとまとまりの実写ドラマとして描かれている。
- 7) 詳しくは、1作目の開発について記した阿部ほか（2018）で論じている。

- 8) 多様な指名方法を採用している教師もいるはずだが、「発問し、挙手をつのり、少し間をとった後に授業者の判断で指名する」という手法が用いられることが、現在においてもかなり多いと筆者には思われる。また、「指名計画」という言葉があるように、誰を指名するのかを予め教師が計画しておくことが重要だという価値観は今も根強いと思われる。
- 9) この段落の記述内容はデータにもとづき客観的に実証したものではないが、重要な課題だと筆者らで共有されているものであり、本研究を進めるきっかけの1つでもあったため、取り上げることにした。
- 10) 自殺総合対策大綱（厚生労働省2017）では、「子ども・若者の自殺対策を更に推進する」ことが当面の重点施策とされており、「つらいときや苦しいときには助けを求めてもよいということを学ぶ教育（SOSの出し方に関する教育）を推進する」と記されている。また、文部科学省（2018）も、子どもの自殺予防のための取り組みが十分に行われているとは言い難いと指摘し、「SOSの出し方に関する教育を少なくとも年1回実施する」よう学校に求めている。
- 11) 一般的に、スクールソーシャルワーカーとは、社会福祉に関する専門的な知識や技能を有しながら、家庭、学校、地域等と適切に連携をしながら、児童・生徒の問題解決へ向けた支援を行う職である。詳しくは、文部科学省（2006）などを参照のこと。
- 12) 阿部ほか（2019）からの引用である。
- 13) 阿部ほか（2019）からの引用である。
- 14) 欠席者がいる場合やアンケート未回答がある場合もあった。
- 15) 本授業プログラムでは、構造的で見た目も美しい板書を残すことは重要ではなく、あくまで意見を可視化するための共通のメモ帳のようなものと板書を位置づけてもらいたいと考えている。そうしたことも講義内で伝えることにした。また、PCの操作については、動画の再生もあれば「抽選アプリ」の操作もあるため、慣れていない者にとっては確かにハードルが高いかもしれない。今回は教育委員会の担当者らがサポートすることとしたが、そうでない場合には、PC操作に習熟する時間を十分にとることも必要となるだろう。
- 16) 今回の企画では、ストップイットジャパン株式会社が提供する相談アプリを授業の最後に紹介することになっていた。アプリの詳細について教えてほしいという意見であった。
- 17) コメントはプリントに記載し、配布した上で口頭で補足説明を行うことにした。取り上げた記述は14件、文字数は2,000字程度であった。
- 18) 模擬授業を参観しながらメモしたことをその場でスライドに記載し、投影しながら説明を行った。一般的な授業技術に関することや、展開の仕方に関することなどを中心に17項目について助言をした。項目数が多いかと懸念もしたが、授業実施日が迫っていることもあってか、熱心に聴いてもらえたと感じられた。なお、このように授業に対する指導をその場で言語化・文字化して授業者らにフィードバックするという手法は、講師が日頃の研究や業務として行っているものである。慣れた手法だということであるが、他の手法の方が有効であるかもしれないし、慣れていない人には行いづらい手法かもしれない。今後、講師役の属性や育成方法などについても検討していく必要があるだろう。
- 19) コメントはプリントに記載し、配布した上で口頭で補足説明を行うことにした。取り上げた項目は6点、文字数は1,500字程度であった。
- 20) モデル指導案とワークシートで文言が異なる箇所があった。大きな問題ではないものの、開発者側のミスを確認し、今後へ向けて修正しておくこととした。
- 21) 前述のとおり、子どもたちとうまくやりとりができていたと感じられたことを、改めて言語化して伝えた。また、参観者に対しては、「[生徒の意見について、自分ならどう問い返すかな?』と考えながら見る」ことを勧めた。なお、本研修ではアクティビティのようなものはほとんど行っていなかったが、今回の気づきをもとに、よくある意見とその意見への対応方法を考えるようなワークを取り入れることを今後の課題としたいと考えている。
- 22) 「私たちの選択肢」では、授業の展開についての補足（次に何をすべきか）は、動画中のナレーションでも話される。今後の授業者を想定し、次の内容を伝えた。「SSWお二人とも、「この後の展開は、抽選で決める」というようなことをご自身で説明いただいた上で、「抽選方法」の動画を見ていたように思われます。お話がお上手な方はそれでもよいのですが、一応、動画を見れば「進み方」がすべて指示されるように作ってはいます。[中略]動画の指示に淡々と従って進行することも可能です(例:次はどうなるのでしょうか。進め方を動画で確認しましょう→動画から抽選するよう指示が出るので従う)。はじめて教壇に立つというような方は、そのような進め方もアリかと思えます。」